

必要としている人が いるから——

被災者への買い物支援

みやぎ生協

東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県石巻市。市内の避難所は10月11日ですべて閉鎖されたが、生活再建への道のりは依然険しい。買い物に苦労している仮設住宅の入居者や、津波で店が無くなった沿岸部の被災者に対して、生協は何ができるのか。みやぎ生協の「買い物支援」の取り組みを紹介する。



集合住宅や仮設住宅を巡回する「せいきょう便」。

「買い物弱者」に なった被災者たち

宮城県第2位の人口を擁する石巻市。その津波被害は甚大だ（死者5、278人、行方不明者688人[※]）。被災者は、仮設住宅に入居したほか、被災した自宅を修復したり、残された2階で暮らしたりしているが、買い物にはとても苦労している。

というのも、仮設住宅は沿岸部から離れた場所に多いため、津波で車を失った人たちには交通の手段がない。また、沿岸部に住み続ける人たちは、震災前に利用していた小売店の多くが閉店もしくは休業しているため、「買い物弱者」となっているのだ。

みやぎ生協は、このような被災者の買い物を支援するため、「共同購入ステーション石巻」と移動販売車「せいきょう便」という二つの取り組みを行っている。

商品受け渡し場で コミュニケーション

6月28日にスタートした「共同購入ステーション石巻」は、みやぎ生協・共同購入石巻支部の中に開設された「商品受け渡しの場所」だ。

市の北部の高台にある石巻支部の隣には、仮設住宅が1、100世帯以上



みやぎ生協 共同購入運営部
石巻支部 支部長
斉藤則男さん

ある。近くに店はなく、入居者が買い物に困っていると聞き、ボランティア団体を通じて利用者を募った。現在の利用登録者は40人以上に上る。

仕組みは共同購入と同じで、1週間前に注文書を受け取り、翌週その商品をお渡しする。もちろん配送料はかからない。月曜日から金曜日まで毎日利用できるが、現在は火曜日と木曜日に利用されている。組合員には午前10時から午後6時の間に商品を取りに来てもらう。

そもそのもきつかけは、市内にあった旧・蛇田店が移転した跡地に建設された福祉施設「こくぶのお家いしのまき」にステーションがあったこと。10年ほど前から30人程度が利用している。

「それを支部でもやろうじゃないか」と考えたのは、「共同購入ステーション石巻」を立ち上げた石巻支部支部長の斉藤則男さん。「ステーションのノウハウはありましたし、被災地に対する生協の役割として、仮設住宅の居住者同士との交流の場をつくることも必要だと

※ 死者数は11月2日現在、行方不明者数は10月15日現在のもの。



「共同購入ステーション石巻」を利用している内海さん(左)は、単身で仮設住宅に入居している。顔なじみになった三浦さんと談笑。移動販売車「せいきょう便」も利用していて「とても助かっています」。

思ったのです」と語る。

阪神・淡路大震災で問題になったように、見ず知らずの他人が集まる仮設住宅では、人びとは孤立しがちだ。しかし、商品を受け取りにステーションを訪れることで、仮設住宅内に知り合えることができるし、職員との交流も生まれると考えた。

実際に、石巻支部でコープ委員たちが開いたお茶会で、こんなシーンがあった。

「津波でお嫁さんを亡くし、生後6カ月の孫を育てることになった60代の女性が、『この子をどう育てていこうかと考えると死にたくなる』と話し始めました。すると、かつてお嫁さんを病気で



みやぎ生協 店舗運営部
営業担当課長
菅原 茂さん

亡くして孫を2人育て上げた70代の女性に、『大丈夫よ。ちゃんと育つわ』とご自分の体験を語りながら一生懸命慰めていたんです。悩んでいた女性が帰りに際に『来てよかった』とおっしゃっていたのが印象的でした(斉藤さん)

当初は斉藤さんが「共同購入ステーション石巻」を担当していたが、9月からはパート職員の三浦浩美さんが専任となった。自身も被災者である三浦さんによると、今の利用者は仮設住宅に入居してから生協を知った人がほとんどだという。「ステーションのような取り組みって、普通の企業ではできないことだと思えますよ」と、この仕事を意気を感じているようだ。

商品を取りに来て、三浦さんと談笑していた内海博子さんに話を聞いた。「仮設住宅に1人で住んでいます。火曜日はこのステーション、水曜日は『せいきょう便』を利用して入るので、週に2回も生協の商品が手に入るので、とても助かっています」と話す。

実は、この仮設住宅には週に1回、「せ

いきょう便」も訪れているのだ。

利用してもらうために 品ぞろえを試行錯誤

「せいきょう便」とは、石巻市の蛇田(へびた)店の分店として、生鮮品や食料品を積んで石巻市と東松島市を巡回する移動販売車のこと。2トントラックに冷蔵ケースを装備したこの車両は、ならコープがみやぎ生協に寄贈したもので、生協共立社(山形県)から運営ノウハウを学び、8月5日から運行している。

販売する商品は、野菜、果物、肉、魚、惣菜、パンなどの日配品を中心に650アイテム。午前9時から積み込み始めて、午前10時に出発。補充のため昼過ぎにいったん店に帰ってきて再び出発し、夕方6時ごろ帰着というスケジュールだ。

移動販売車の目的は大きく分けて二つある。一つは「共同購入ステーション石巻」と同じく仮設住宅への商品供給。もう一つは、津波の被害で閉店したアイトピア店と休業中の石巻渡波店(わたなべ)を利用していた組合員への対応だ。

スタート当初は平



接客中の森さん。誰にでもこやかに接する。かつて店長を務めていた時のパート職員や組合員に出会うこともしばしば。

日5日間のみの運行だったが、10月11日からは月曜日から土曜日の週6日運行となった。「せいきょう便」の立ち上げから携わっている店舗運営部営業担当課長の菅原茂(すがわら)さんは、コース設定の難しさをこう語る。

「仮設住宅を中心に巡回するため、最初はどれくらい利用してもらえるのか、時間がどの程度かかるのか分かりませんでした。そこで多少余裕をもってコースをつくり、徐々に停車ポイントを増やしていったのです」

品ぞろえも悩ましい。菅原さんは「スペースが限られているため、生活に欠かせない商品を厳選します。要望があれば次の週にお届けする『特注対応』も行なっています」と言う。トラックに冷凍庫は備えていないので、ドライアイスを発泡スチロールの箱に詰めて運んでいる。

利用者数（目標値＝1日90人）、供給高（同10万4,500円）、客単価（同1,150円）とも徐々に伸びており、目標達成まであとわずかだ。菅原さんは「利用してもらうことが、お役に立つこと。大事なのは品ぞろえです」と語る。

『「せいきょう便」は店舗よりも組合員さんとコミュニケーションしやすい。いろいろな人に話を聞いて、ニーズをつかむようにしています』と言つのは、「せいきょう便」の担当である森昭行さん（P.26写真）。アイトピア店の店長を



「せいきょう便」の内部の様子。生鮮品から日用品まで、厳選された商品がそろえられている。

長年務め、退職後は嘱託として店舗業務に携わってきた。半日ほど同乗させてもらったが、常に組合員の話に耳を傾け、さあ出発という時に新たな客が来ても、イヤな顔一つせずにトラックに招き入れる。「せっかく来てくれたんですから『今日はおうおしまいです』なんて言えませんが」と森さんは笑う。県営住宅に住む菅沼礼子さんは、「助かってますよ。スーパーマーケットが休業中で、再開したコンビニエンスストアも遠いので、買い物不方便……。生鮮品を見て買えるのでうれしいわ」と言う。

このような組合員の声を受け、みやぎ生協は、石巻地域同様に仮設住宅が多く、買い物に不便を強いられている南三陸町と気仙沼市を巡回する、2台目の「せいきょう便」を導入することを決めた。

生協の商品を待っている人がいるから

「共同購入ステーション石巻」と「せいきょう便」を両輪として、被災者のくらしを支えているみやぎ生協。また、蛇田店では4月下旬から「こくぷれあい便」も走らせている。これは高齢者や体の不自由な方を対象とする買い物代行サービスで、もともとは仙台地区で行なっていたが、震災を経て利用条件を緩和。1カ月1,050円の配達料で、週に2回、店舗の商品をパート職員が自宅まで届ける。



夕暮れの仮設住宅の路上に停車して利用者を待つ「せいきょう便」。通りすがりに「次はいつ来るの?」と声を掛けてくる人も。

いきょう便」、「こくぷれあい便」のすべてを利用すれば、ふだんのくらしにはほとんど不自由をしないくらいに、必要な商品を生協から購入することができる。生協ならではの、地域に根差したきめ細かい施策といえよう。

森さんが運転する「せいきょう便」が蛇田店に戻った時、日はすっかり暮れていた。到着するやいなや、パート職員が集まってきて商品を降ろしていく。ドライ品以外はすべて売り場に戻すほか、セール品として値札を張り替えるものもある。そして明日の朝もまた積み込んだ。

台車を押すパート職員の1人に「大変ですね」と声を掛けると、「そうよ。でも生協の商品を待っている人たちがいるからね!」。その一言に、生協という組織の本質が表れていると感じた。

（文・写真 前川太一郎）



蛇田店に戻ると、部門ごとにパート職員がやってきて商品を店内に戻す。森さんは棚を掃除し、ドライ品の補充リストを作る。明日もまた、生協の商品を待っている人がいる。